

汪精衛南京国民政府研究概略

(北京師範大学) 蔡 徳金 著
(本溪大学) 任 常毅 訳

1. 汪精衛政權研究の主な成果

汪精衛南京国民政府は、かつて日本の中国侵略軍が、華北、華中、及び華南の占領区で一手に作り上げ、操った傀儡組織の一つであり、汪精衛政權の樹立とその存在の歴史を研究することは、中日戦争史を研究する上で重要であり、軽視してはならない重大な歴史課題である。

80年代の初めから、わずか10年たらずの時間で、中国大陆でも台湾でも相次いで汪精衛政權樹立に関する専門的著作、訳本、辞書及び資料などが出版された。また、大量の学術的な論文も発表され、注目すべき成果をあげた。

1982年7月に、中国社会科学出版社は北京師範大学蔡徳金と李恵賢が共同編集した『汪精衛偽国民政府紀事』を出版した。それは簡略な辞書ふうのものであるが、中国大陆で初めて汪精衛政權史を全面的、系統的に記述した出版物であり、大いに歓迎された。初版で5万冊を刷りすぐに売り切れ、国内や香港、台湾、日本、アメリカなどへ広範な影響を及ぼし、国内外の汪精衛政權研究において重要な参考資料になった。その後、1984年2月、4月及び1985年5月に、上海人民出版社から復旦大学歴史系の黄美真、張雲、余子道、劉其奎、曹振威ら編の『汪精衛集团投敵』、『汪精衛国民政府成立』、『汪精衛国民政府“清郷”運動』の3冊の歴史資料集が出版されたが、これらは彼らが編集出版した、汪精衛政權についての大型歴史資料集の一部にすぎない。1986年7月に、中国社会科学出版社は、蔡徳金が編集、注釈した『周仏海日記』上下を出版した。『日記』は1937年7月1日から始まり、1945年6月9日に終わる。1939年のまる1年分が紛失されてはいるものの、汪精衛政權

についての個人的記録としてはほぼ完全といえる。同年12月、上海档案馆は『日偽上海市政府』を出版したが、この本は歴代の上海市政府の成立および政治、経済、宣伝教育などの歴史档案資料を集めて記録したものである。上海『档案與歴史』雑誌は、1988年第1号で汪精衛の1940年の日記を発表した。1987年9月、1989年12月に、北京の燕山出版社と光明日報出版社は前後して北京档案馆編集研究室の『日偽在北京的五次治安強化運動』と、『日偽北京新民会』の2冊を出版した。1992年7月、江蘇古籍出版社は、南京档案馆編の『審訊汪偽漢奸筆録』(上・下)及び中国歴史第二档案馆が保存していた汪精衛政權の『国民政府公報』を出版した。

1991年5月、1993年6月、中国文史出版社は黄美真編の『偽廷幽影録』と蔡徳金、王昇が編集した『汪精衛生平紀事』を出版した。これらの出版物は汪精衛政權の研究に豊富な歴史資料を提供した。

1986年からは、一連の汪精衛政權を研究する専門的な著作が出版されることになった。

その年の11月、中国文史出版社は蔡徳金、尚岳が編集した『魔窟——汪偽特工総部76号』を出版したが、これは当事者の回想によって汪精衛政府総本部の犯罪活動を記述した専門的な著作である。1987年6月に、河南人民出版社は黄美真、張雲が著した『汪精衛集团叛国投敵記』を出版したが、これは初めて系統的に汪精衛集团が重慶から脱走したこと、及び偽国民政府の成立経過を記した専門的な著作である。同年7月、復旦大学出版社は復旦大学歴史系中国現代史教研室編の『汪精衛漢奸政權的興亡』を出版したが、これは特定

のテーマで書いた汪精衛政権史の専門的な著作である。1988年8月、解放軍出版社は黄友嵐『抗日戦争时期的“和平”運動』を出版した。内容としては、汪精衛が日本と秘密に交渉したこと、重慶から脱走したこと、及び偽政府が成立した経過を記した部分が相当な紙面を占めている。同年1月、浙江人民出版社は朱金元、陳祖思『汪偽受審紀実』を出版した。1993年2月に、広西師範大学は蔡徳金著『歴史的怪胎——汪精衛国民政府史』を出版したが、これは汪精衛政権史に関する初めての専門的な著作である。同7月、河南人民出版社は、費正、李作民、張家驥『抗戦时期的偽政権』を出版したが、それは満洲国、蒙疆、臨時、維新各政府及び汪精衛国民政府などの日本軍占領区政権の樹立、変遷、及び滅亡の過程を論述している。

汪精衛政権史研究の一環として汪精衛、陳公博、周仏海その他の人物の個人的な伝記が相次いで出版された。1986年10月に上海人民出版社は、黄美真主編の『汪偽十漢奸』を出版したが、その内容は汪精衛政権の首領である汪精衛、陳公博、周仏海、褚民誼、陳璧君、羅君強、王克敏、王揖唐、梁鴻志、李士群ら売国奴について、黄美真、石源華、張雲、曹振威、劉其奎らが作成した伝記を収録したものである。1988年4月、四川人民出版社は蔡徳金『汪精衛評伝』を出版した。この前に、武漢出版社と吉林文史出版社も相次いで李理、夏潮が編集した『汪精衛評伝』と、聞少華『汪精衛伝』を出版した。1992年5月、1993年5月に河南人民出版社も前後して蔡徳金『朝秦暮楚的周仏海』、『汪偽二号人物陳公博』の2冊を出版した。1992年10月、江蘇省政治協商会議文史資料編集委員会は自ら編集した江蘇文史資料第48集の中で、蔡徳金『汪偽巨奸』を特集して発表した。これ以前の1990年12月、1994年3月に武漢人民出版社、東方出版社は前後して聞少華の『周仏海評伝』、『陳公博伝』を出版した。

それと同時期に海外の学者の一連の専門研究著

作と、日本が中国を侵略していた時期の当事者の回想録も出版された。これらの研究著作の中で、最も重要なのは、1978年7月に商務印書館が出版し、陳体芳、楽刻らが翻訳した『抗日戦争时期的通敵内幕』（上・下）で、作者は米国スタンフォード大学歴史学部助教授John・Hunter・Boyleである。当事者の回想録としては、主に今井武夫『今井武夫回憶録』（原名『支那事変の回想』）と、犬養健『誘降汪精衛秘史』（原名『揚子江は今も流れている』）及び西義顕『日華“和平工作”秘史』（原名『悲劇の証人：日華和平工作秘史』）である。『今井武夫回憶録』は、1978年5月に上海訳文出版社より出版された。1987年8月、中国文史出版社は、天津市政治協商会議編集委員会が新しく翻訳した『今井武夫回憶録』を出版した。『誘降汪精衛秘史』と『日華“和平工作”秘史』の2冊は、本溪大学の任常毅が翻訳し、江蘇古籍出版社よりそれぞれ1987年7月、1992年8月に出版された。

前述の出版物のほか、『歴史研究』、『抗戦史研究』、『民国档案』、『歴史档案』、『档案與歴史』、『北京档案史料』、『民国春秋』、『江蘇省文史資料選集』などの大型歴史学雑誌及びその他の学術出版物も、相次いで汪精衛政権についての研究成果を掲載したり、また歴史資料を若干公表した。そのうち代表的な論文として、沈家善「汪精衛叛国投敵初探」（『杭州大学学报』1982年第2号）、蔡徳金「汪偽集团叛国投敵的前前後後」（『近代史研究』1983年第2号）、余子道「日偽在淪陷区的“清鄉”活動」（『近代史研究』1980年第2号）、王国華「從档案材料看日偽的五次治安強化運動」（『北京档案資料』1987年第3号）、武錦蓮「汪偽政権的“新国民運動”剖析」（『上海師範学报』1983年第3号）、石源華「汪偽时期的“東亞連盟運動”」（『近代史研究』1984年第6号）、陳戊傑「汪精衛降日売国的“東亞連盟”理論剖析」（『抗日戦争研究』1994年第3号）、蔡徳金「試論抗戰

時期蔣汪關係の幾個問題」(『民国档案與民国史學術討論會論文集』档案出版社1988年9月), 李安慶「偽中国連合準備銀行浅析」(『歴史档案』1984年第1号), 王士花「日本侵華戦争時期対華北工鉦資源的掠奪」(『抗日戦争研究』1993年第1号), 石源華「汪偽政權的覆滅與漢奸的審判」(『档案與歴史』1986年第2号)などがあげられる。

国内外の学者が汪精衛政權の研究についての學術交流を促すために、1986年5月、北京師範大学で第1回の汪精衛政權シンポジウムを催したが、これは建国以来初めての抗日戦争期日本占領区研究についての専門學術會議であった。中華民國史及び中日關係國際シンポジウムが開かれるたびに、汪政權問題は會議の重要な内容とされた。長い間、汪精衛政權について無関心であった台湾學術界でも最近では問題にされ、国民党史会秘書邵銘煌は、1992年8月及び1993年2月に相次いで「汪精衛政權参加“大東亜戦争”之経緯」、「高宗武対日謀和活動」を発表した。

2. 研究の主な内容

汪精衛政權についての研究は、内容が豊富で各方面に及んだが、主なものとして次の数点があげられる。

第一、汪精衛集団と日本との秘密交渉及び重慶からの脱走始末である。

汪精衛は、国民党内の親日派首領で、蒋介石に次ぐ2番目の重要な人物であるだけに、日本による国民党の抗日陣營の分裂を援助する重要な立場にあった。汪精衛の対日秘密交渉は、1938年1月から始まったが、まず上海で董道寧外交部亞洲司日本科長と日本の原満鉄株式会社南京事務所主任であった西義顕を接触させた。それにより、董道寧は2月頃東京へ行き、本田雅晴日本参謀本部次長及び影佐禎昭謀略課課長らと会見し、日本にも和平願望があることを知った。その後、高宗武外交部亞洲司司長も香港で西義顕、犬養健、松本重

治らと会談した。それと同時に、日本側もコーライタリア大使を通して汪精衛と接触し、汪精衛に対し蒋介石の下野を促すこと、国民政府の改組、政府權力の掌握、「防共協定」の参加を要求し、また汪精衛の日本秘密訪問や近衛文麿首相への手紙による挨拶を要求した。これら一連の活動で⁽¹⁾、高宗武が「命令を受け」秘密裏に日本へ行くことになった。

コーライ駐華イタリア大使によって行われた和平工作について、蔡徳金『朝秦暮楚的周仏海』の中で、初めて日本大使館档案、すなわち1938年6月27日日高上海総領事が、堀内在北京大使館参事官に送った極秘電報「松本、イタリア大使談話」が引用された。高宗武は当時、香港の日本研究所主任をしていたが、彼の任務は香港で日本側の情報を収集することにあつた。しかし、高宗武は6月23日に周隆庠を伴い香港を離れ、上海を経て東京に向かった。高宗武は香港に戻った後蒋介石への手紙の中で、彼の日本行きは「勝手」な越権なので、「贖罪」するといっている。ならば、彼は自分で「蒋介石に黙って自ら東京に行くことを決めた」⁽²⁾のか、それとも誰かの指図でそうしたのか。これまで蒋介石の命を受けていると理解する人もあつたが、実際は汪精衛の指示の下、周仏海が直接、高宗武を日本へ交渉に行かせたのである。

董道寧及び高宗武が日本と交渉した経過について、邵銘煌は「高宗武対日謀和活動」という文章の中で、台北国民党党史会に収蔵された董道寧及び高宗武の東京行きの経過報告、すなわち「總統府機要室特交党案第27巻」という档案資料を初めて引用し、これにより影佐禎昭、今井武夫、犬養健及び西義顕らの回想録の中にある高宗武の東京行きの時間及び日本側の要人との会談内容など、諸方面にわたる偽りの記録を正した。高宗武は7月2日に横浜に着き、その晩に東京に入った。7月3日から8日までの間、高宗武は松岡洋右日本

外相、影佐禎昭陸軍省軍務課長、多田駿参謀総本部次長、岩永裕吉同盟通信社社長、今井武夫陸軍省中国課課長、板垣征太郎陸軍大臣、首相近衛及び彼のブレーンである西園寺公一、犬養健らと会談した。7月9日、東京から横浜に向かい、船で香港に戻った。高宗武は香港に戻った後、あえて漢口に返って報告することはせず、周隆庠にその「東渡日記」、「会談記録」、「個人観感」及び蒋介石宛の手紙⁽³⁾を持たせ、7月22日、漢口で周仏海に手渡し、陳布雷を通じて蒋介石に手渡すよう命じた⁽⁴⁾。

高宗武は東京行きの結果、日本側が提出した汪じきじきに時局を收拾し、日本との和平を実現するという決定を受け入れ、かつ汪精衛の賛同を得たのであった⁽⁵⁾。

第二、汪精衛が重慶から脱走し、南京で傀儡政権を樹立した理由について。

汪精衛が重慶から脱出した要因については、早くから汪精衛政権研究の中で頻繁に取り上げられている問題である。多くの学者の認識では、多種の要因があり、例えば高宗武の斡旋による日本側との往来交渉、汪精衛の妻璧君及び腹心である陶希聖、周仏海らの甘言、戦局の不利と中国への国外からの援助不足、日本からの帰服の勧めなどがあげられる。しかし、これらの客観的な要因のほか、汪精衛自身のことをいえば、主な要因は2つの方面にまとめられる。その一つは民族投降主義、二つは頑なな反共産主義である。

第三、汪「新中央政府」問題の提示及び成立の経過について。

汪精衛政権の成立について、学術界では次の2つの問題をめぐって分析討論を行った。第一、汪精衛を領袖とする新中央政府の成立についての問題はいつ提示したのか。第二、汪精衛政権の成立は何故遅れたのか。

汪精衛を領袖とするいわゆる中国新中央政府樹立問題について、当事者として金雄白は、1957

年に「朱子家」というペンネームで香港の『春秋』という雑誌に「汪政権の開場與収場」という回想文を連続して発表した際、次のように記している。汪精衛は重慶から脱走した時、他に政権を樹立するつもりはなかったが、1939年3月21日、ハノイで暗殺によって汪の腹心である曾仲鳴が銃殺されたことで、「汪氏は激怒し、出国の計画を変更し、彼自身で事態を收拾し、和平を実現する責任を担うことを考えるようになった」。だが、その目的は汪精衛の責任逃れにすぎなかったのである⁽⁶⁾。

実際、日本は近衛による第一次対華声明から、重慶国民政府を打倒すると共に、いわゆる中国新中央政府を樹立することを対華戦略目標としていた。1938年11月3日、近衛は彼が発表した対華政策声明の中で、「もし国民政府がこれまでの一貫した政策の放棄と人事組織の改編を実行し、新たな成果をおさめ、新秩序の建設に参加すれば、我が方は拒絶することはない」⁽⁷⁾と主張した。このことは「国民政府を相手にしない」という声明を撤回したようにみえるが、日本の言ういわゆる『国民政府』とは、すでに蒋介石を領袖とした抗日を堅持する国民政府ではなく、抗日連共政策の放棄と人事組織の改編を実行し、新たな成果を収めた日本の「新秩序建設」に参加する、汪精衛を領袖とする中国新中央政府なのであり、11月20日、汪精衛が日本と調印した「重光堂協議」も対華政策声明を原本としている。つまり、汪精衛は将来の中国新中央政府の領袖として、日本とのこの協議に調印したのである。

しかし、汪精衛が「艷電」を発表したあと、汪政権成立促進の大黒柱である龍雲及びその他の軍事将校はそれに応じる様子もなく、重慶の国民政府もこのために崩壊したとか、あるいはたんなる地方政権になったとかいうこともなくて、汪精衛が政府を打ち立てる計画は完全についえた。このような状況下、汪精衛は場所を変え、すなわち日本占領下の南京で新中央政権を樹立する計画を提

出し、ハノイから上海へ逃走したのである。

汪精衛による新中央政府の成立が遅々としていた要因は多方面に及ぶが、根本的な原因は、日本が中国での事変の解決と、中国といわゆる和平を実現するという希望を汪精衛に托さなかったことにある。多くの学者が指摘したように、汪精衛は軍事的実力を少しも持たない国民党政客で、日本が汪精衛に帰服を勧めたのは、たんに国民党及び政府内の影響力を利用して国民党政府軍事將校及び党と政府の要人の追従を促し、重慶国民政府を攻めずとも自滅させ、中国征服を実現させようと企んだからである。1939年6月6日、日本は日本内閣五相会議による決定「新中央政府を樹立する方針」の中で、汪精衛政権成立の時点だけでなく、日本だけが「全局を貫く戦争指導の段階に応じ、自主的な観点でこれを処することができ」、かつ「特に人的要素と基礎的な実力を要する」と強調している。これによって日本は、一方で汪精衛政府樹立の準備を支持しながらも、もう一方で蒋介石との既存の談判ルートを保持してだけでなく、同時に絶えず新しい連絡ルートを開拓していった。その目的は全て、蒋介石との直接交渉を通じて、重慶国民政府が抗日戦争を止め、和平を実現するよう勧めることにあった。汪精衛政府の樹立の時点が幾度も遅延したのも、そして成立してから日本がすぐ外交面の承認をしなかったのも、その原因は全て重慶側からの返事を待つためであった。

第四、日本の汪精衛政権の制圧と占領区への植民地統治。

多くの学者が指摘したように、汪精衛の新中央政府は、日本がこれ以前に相次いで作り上げた蒙疆連合自治政府、中華民国臨時政府及び中華民国維新政府とは異なり、たんに中国新中央政府として成立しただけではない。地域的にも権限的にも大きな相違があり、完備した政府機構を持っていた。名称、主義、旗にもかなりの相違があった。

使ったのは「五色旗」、「龍旗」ではなく「青天白日滿紅旗」で、やはり国民党と称し、「三民主義」及び「国民党」の旗印をかがげ、重慶との相違はただ旗の上に三角形の黄色い布をつけ、上に「和平反共建国」と書いた点だけである。

「分けてこれを治める」というのが、日本の汪政権に対する既定の政策であった。汪精衛の国民政府が成立してから、蒙疆連合自治政府は「高度の自治」の名目で、日本のモンゴル駐留兵団が直接に統治し、2番目の満州国と何ら違わなかった。臨時政府は取り消しを宣言し、華北政務委員会を改設したが、ただその名称を取り消しただけで、既成事実は変わることなく、旗も赤黄青白黒の五色旗のままで、依然日本華北駐屯軍の指導下にあった。汪精衛の中央政府は維新政府の権力に取って代わったにすぎない。汪精衛中央政府は人々に形容されたように「政令城門を出でず」で、正真正銘の傀儡政権であった。

第五、日本の占領区への経済統治と略奪。

日本が全面的に中国侵略戦争を起こしてから、政治面では、華を以て華を制す政策をおしすすめると同時に、経済面では戦いを以て戦いを賄うという政策を実行していった。1938年、日本は華北、華中地域で相次いで華北開発公司、華中振興公司を設立し、軍隊管理、委託経営、日中合併、賃借、買収などの方式で工・鉱業企業、鉄道、道路、通信、商業などあらゆるものを日本の企業に引き渡して経営させた。綿紡績業を例とすれば、日本に略奪された中国人商人の紡績工場は、占領区の被占領前の中国人商人紡績工場総数の87パーセント、織機総数の66パーセントを占める。流通領域では臨時政府によって設立された中国連合準備銀行が発行した日本円と等価な連銀券を発行し、維新政府が華興商業銀行を作って発行した華興券が各地で流通していたことを除いては、揚子江以南の地域では、主に軍用紙幣の発行を利用して金融制御、物資統制を行い、軍配組合を中心

とする物資統制機構を設け、厳密に物資の流通を制御していた。

汪政権が成立したあと、日本軍はそのことを発表し、続いて軍事管制工場を部分的に返還したが、基本的状況の変化は少しもなく、あらゆる経済は依然として日本の直接統制下におかれていた。太平洋戦争の勃発により、特に日本が太平洋の戦場で不利になってから、占領区内での物資の略奪を強め、軍事需要を保证するために、経済政策上もいくつかの改変を行った。1942年4月1日から軍用紙幣の発行を停止し、中央儲備銀行が発行した儲備券を揚子江以南の占領区内での主要な通貨とした。1943年3月、物資統制権を汪政権にわたし、日本と汪精衛政権双方で構成する物資統制委員会指導下に物資統制審議委員会を設けた。それと同時に、合弁公司への調整などを始めた。王士花の「日本侵華戦争時期対華北工鉱企業的控制與掠奪」は、日本の華北の工・鉱企業に対する全面的な統制、華北資源への略奪及びその特長を暴いた。「日本対華北経済的掠奪和統制」という著作は、日本の経済面の政策決定機構の設立及び略奪の状況について、資料を全面的に公表した。程洪「汪偽経済統制概述」（『汪精衛漢奸政權的興亡』に収録）及び蔡徳金『歴史的怪胎——汪精衛国民政府史』は、日本の華中地区での経済統制及び略奪について、比較的多く論述している。

第六、汪精衛政權の滅亡と戦後裁判。

1944年11月10日、汪精衛は日本の名古屋帝国大学付属病院で死去したが、12日に遺体を南京に運び、23日に南京の明孝陵前の梅花山に葬った。汪精衛はどのように死んだのか。病院で死んだのか、それとも謀殺されたのか。以前から種々の誤伝があったが、例えば、汪精衛は日本によって殺害されたとか、軍統の人員が看護婦を利用して毒薬を投与し、慢性中毒で死んだとか、日本で死んだのではなく、上海虹口病院で死んだ、などである⁽⁸⁾。研究者たちは多くの事実を以て汪精

衛の死を論証した。つまり、汪精衛が1935年11月1日に南京で狙撃された時に、背中に残った銃弾が引き起こした脊髄癌で死亡したのであり、死因はそれ以外の原因ではなかった、また、日本で死んだのであり、上海で死んだのではなかった、というものだ。

1945年8月16日、つまり日本が無条件降伏を公表した翌日の午後であったが、5年4カ月あまりにわたった南京汪精衛国民政府も、それにともなうて瓦解した。汪精衛政權に参加した主な人物は、売国奴として相次いで逮捕された。陳公博は日本に逃げたが、祖国に引き渡された。周仏海は一度は国民政府軍事委員会上海行動総指揮を務め、しばらくは重慶白公館に避難していたが、最後は法の処罰から逃れられなかった。1946年の春から、国民党当局は売国奴に対する裁判を始め、陳公博、褚民誼、梅思平、林柏生ら売国奴要人は死刑の判決を下され、執行された。周仏海は蒋介石の寛大な処遇を受け、死刑を無期懲役に減刑されたが、これは売国奴に対する裁判と処置の唯一の例外であった。張雲「汪偽政權覆滅與漢奸的審判」（『汪精衛漢奸政權的興亡』に収録）、蔡徳金『歴史的怪胎——汪精衛国民政府史』、張金元ら『汪偽受審紀実』などが、これについて歴史的記述をしている。

3. 研究の特長及び今後の研究課題

汪精衛政權についての研究をまとめてみると、少なくとも次の3つの特長が挙げられる。

第一、出版されている資料が豊富で研究成果も多いことが注意を引く。

第二、研究の内容はかなり広泛で、多方面にわたりかなり深く研究されている。専門テーマについての論述もあれば、全体的、系統的著作もある。汪精衛、陳公博、周仏海ら売国奴について、個人的伝記もあれば、当事者の日記や回想録もある。大きなものでは汪精衛の政權史から、小さなもの

では具体的問題についての論証まで、各方面にわたって多くの研究成果があるといえる。

第三、研究の方法は、論述を以て歴史に代える、結論あって論証するといった伝統的方法を脱却した。資料の発掘、考証重視、史実の尊重により、汪精衛の日本への脱走と蒋介石との関係、国民党軍が大量に降伏した原因、抗日戦争勝利後蒋介石と汪精衛とは野合したのか、といった一連の問題において、伝統的観点を突破し、史実に符合する結論を出した。

けれども、汪精衛政権についての研究はまだ多くの課題を残しており、さらなる研究、開拓、深化が必要である。

第一、資料に関すること。目下、中国第二歴史档案馆の提供により、すでに汪精衛『国民政府公報』及びその他いくつかの档案資料が出版されたが、全てではなく、依然さらなる発掘と出版の必要がある。筆者が知るところによれば、少なからざる資料、特に汪精衛個人についての档案資料は、大部分が現在台湾国民党党史会または国史館に保存されていて、世に知られないままである。しかし、これらの資料の公開及びその出版と利用は、汪精衛政権の研究に極めて重要である。日本側の汪精衛政権に関する資料はすでに大量に公表されて、秘密保持の制限を受けるものは少ないが、言語の関係で、整理や中国語で出版する必要のあるものもある。

第二、研究の範囲から見ると、目下汪精衛政権研究についての多くはやはり、蘇（江蘇）浙（浙江）皖（安徽）といった日本占領区域に限られている。蒙疆連合自治政府についての研究は甚だ少なかっただけでなく、北平臨時政府及びその後の華北政務委員会、また湖北、広東、及び汕頭、海南島、厦門等の地域での日本支配の実状についての研究は少なく、さらに深く研究する必要があるだろう。

第三、内容によってはまだ全般的なものではな

く、研究者がほとんど手をつけていない課題もある。総じていえば、汪精衛の脱走、その政権の設立経過、及びその政治支配についての研究は多いが、軍事、教育、経済統制、略奪についての研究は手がつけられたとはいえ、まだまだ浅くて全般的ではない。

[注]

(1) 蔡德金「試論抗戰時期蔣汪關係的幾個問題」(『民国档案與民国史學術討論會論文集』 档案出版社 1988年9月出版)。

(2) 黄美真、張雲『汪精衛集团叛国投敵記』 河南人民出版社 1987年6月62頁。

(3) 邵銘煌「高宗武対日謀和活動」 台北中央研究院近代史研究所編。『近代中国歴史人物論文集』 1983年6月405, 407頁。

(4) 周仏海「中日事変秘聞——我的斗争記」,『周仏海日記』(下) 1233, 1234頁。

(5) 蔡德金『歴史的怪胎——汪精衛国民政府史』 広西師範大学出版社 1933年2月405, 407頁。

(6) 金白梅『汪政権始末記』(原名『汪政権的開場與収場』) 合訂本 1965年8月再版 一. 21頁五. 38頁。

(7) 「政府声明——雖国民政府, 也不拒絕」 1938年11月3日,『汪精衛集团投敵』95頁。

(8) 霍実子「太平洋戦争時期機樁史実の大掲密」, 香港『広角鏡』第123期(1983年9月16日)。

李直峰「抗日期間的対日無線電偵破工作」, 上海市政協文史資料工作委員会編『戦時風雲録』(下)。